

日本教育先哲叢書



編輯顧問

編輯責任者

合資文教書院發行

東京帝國大學教授
文學博士 入澤宗壽

東京女子高等師範
學校教授文學博士

京都帝國大學名譽
教授文學博士 小西重直

石川謙

東京女子高等師範
學校校長 下村壽一

東京帝國大學
助教授

東京帝國大學名譽
教授文學博士 吉田熊次

海後宗臣

日本教育先哲叢書 第三卷

奈良女子高等
師範學校教授 唐澤富太郎著

親鸞・道元・日蓮

著者略歴

昭和十二年東京文
理科大學教育科卒
業

昭和十七年同大學
研究所修了、同大學
學副手

昭和十七年任奈良
女子高等師範學校
教授

主なる著述

親鸞の人間觀・
教育觀

認 承 協 文 出
號 370263 ア



日本教育先哲叢書
第3卷 親鸞・道元・日蓮

定價一圓六十錢

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目
振替口座東京四四三三三番

合資會社 文教書院
日本出版文化協會會員二二八五〇五番

著者

唐澤富太郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目九番地
合資會社 文教書院

印刷者

東京市小石川區柳町十一番地
行木

印刷所

東京市小石川區柳町十一番地
進行舍印刷所

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

昭和十八年三月十日初版印刷 昭和十八年三月廿日發行〔二〇〇〇部〕



諸煩惱豈不能斷哉末末猶欲又及我末
 在彼煩惱之中煩惱即眼識不能見之態
 無礙常照中上余昔善行若信玩有
 一事非所發能來而降顯之所同
 又與之同使固有之可知
 周如來不願我主信樂然得何以故
 論主言一也也若我衆主歸一治余

普勸坐禪儀

入宋傳法沙門通元撰

原夫道本圓通乎假修證

宗乘自在何貴功文陀宇

全體迦毗摩孩義信拂拭之

序

中世的世界の現代的意味、中世鎌倉新佛教のもつ主體的眞理の偉大さが新らたなる眼を以て着目せられ、その遅しき思想が重視せらるゝに至つたことは、まことに我國思想界にとつて祝福すべきことである。と同時に、このことはまた今後の極めて大いなる課題を示してゐる。

思ふに歴史的傳統に立脚し、新らたなる創造を目指して進むべき我國の教育は、飽くまでも日本的世界觀・日本の思惟の確かなる基礎に立脚するものでなければならぬ。こゝに我々が我國教育の世界觀的基礎を究明すべく、中世的人間像の中にくひ入るべき切なる要求がある。

日本佛教、分けても鎌倉新佛教は、我國國民陶冶史上忘るゝことの出來ぬ役割を演じ、鎌倉時代は勿論、それ以後今日に至るまで長く精神的感化と思想的影響を與へ、日本人的世界觀に缺く能はざる思想的基礎を與へたものと云はなければならない。

過去に於て養ひ來つたこれら日本佛教の精神は、同時に今後の大東亞建設の皇道教育學に貢獻すべき多くの思想を藏し、その大乘的空觀哲學は、八紘爲宇の日本世界觀と結びつき、偉大なる思想

的使命を擔ふべきものと云はなければならない。

佛教渡來後六百年、聖德太子の一大乗の御精神を展開させ、眞に日本的なる佛教にまで發展さすに至つた新佛教の開祖親鸞・道元・日蓮は、如何に偽らずに人間の自覺の深さにまで到達したことであらうか。又如何に徹底せる修行に終始したことであらうか。しかして又これ等の自覺と修行とに基づいて如何に熱烈なる教化に一身を献げたことであらうか。これ等聖者の眞實の叫びは、時を越えて我々の魂に肉迫し、その日本的なる佛教的教化と思想は、主體的に皇道教育學を建設せんとする我々に無限の教育的眞理を示してゐる。

私はこゝに、これ等偉大なる聖者の思想の一端に觸れ得たことに對する衷心よりの感謝を捧げざるを得ない。たゞ淺學未熟、かかる小著を以て、これ等偉大なる宗教家の思想の片鱗だにも示し得ざることを悲しまざるを得ない。たゞ本書が叢書の一冊として、制限せられた紙數内に於て、この方面への關心をもたると教育同朋者へ献げ、今後の大いなる實りを期することが出來るとするならばこの上もない悦びである。

本書の叙述にあたつては、先づ總論的にその時代的性格と新佛教のもつ性格とを記し、次に三師の各々について、その生涯、思想、教育思想、研究文献を掲げ、更に三師の教育思想を示すべき代

表的原典を掲げて註釋をなした。尙ほ最後に、三者を要約的に比較考察し、且つこれ等新佛敎に現はれたる教育的理念の考察をも怠らなかつた。

昭和十七年十月

著者

序

三

凡 例〔原典の取扱について〕

- 1 濁りの無いものは濁りを附して読み易からしめた。
- 2 難讀の文字には振假名をつけ、また本來振假名の附してあるものと雖も必要なきものと思つたものは省略することとした。なほ思想上より適當に改行したところもある。
- 3 漢文は假名交り文に改め、假名文は一部漢字交り文に改め、又明らかなる誤字脱字は訂正し返點などは成可く用ゐなかつた。
- 4 片假名はこれを平假名にして引用してゐる。なほ句讀點も読み易きが如くに書き改めた。
- 5 原典の掲載に當つては全文を掲げたものもあるが、中には一部省略して理解を助け、且つ成可く多くの原典を掲げようと努めた。尙ほ原典の省略には特別の記號をつけなかつた。
- 6 原典の語句の解釋には宇井伯壽氏監修、コンサイス佛教辭典を始め、織田得能氏、佛教大辭典、神保如天氏・安藤文英氏、禪學辭典、望月信享氏、佛教大辭典などに據るところが多い。

目次

口 繪
〔表〕……………右、親鸞筆 左、道元筆
〔裏〕……………日蓮像

序

總論

- 〔一〕 鎌倉新佛教とその時代……………一
- 〔二〕 鎌倉新佛教の性格……………二

親鸞

- 〔一〕 生涯……………一七
- 〔二〕 思想……………二九

一、自然法爾 二、愚 禿

〔三〕 教育思想……………三六

一、弟子一人もたず 二、佛恩報謝

〔四〕 著述及び研究文獻……………三九

〔五〕 原 典……………四四

〔一〕 和 讃……………四四

〔二〕 消 息……………五一

〔三〕 歎 異 抄……………五五

道 元

〔一〕 生涯……………八一

〔二〕 思想……………九六

一、即心是佛 二、本證妙修

〔三〕 教育思想……………九

一、人は練磨によりて仁となる

二、身心一如の行修

三、自未得度先度佗

四、集團教育の理念

五、正師を求む

〔四〕 著述及び研究文献……………二〇

〔五〕 原典……………二六

〔一〕 正法眼藏……………二六

〔二〕 正法眼藏隨聞記……………一六五

日蓮

〔一〕 生涯……………一八七

〔二〕 思想……………一九六

一、娑婆即寂光土

二、法 國 冥 合

三、事の一念三千

四、即身成佛

〔三〕 教育思想	101
----------------	-----

- 一、法華經行者
- 二、國家と教化

三、教機・時・國・序

〔四〕 著述及び研究文献	106
--------------------	-----

〔五〕 原典	110
--------------	-----

〔一〕 如來滅後五百歲始觀心本尊鈔	110
-------------------------	-----

〔二〕 教機時國鈔	110
-----------------	-----

〔三〕 消息	116
--------------	-----

親鸞・道元・日蓮の要約的比較	114
----------------------	-----

鎌倉新佛敎に於ける敎育的理念	115
----------------------	-----

總 論

〔一〕 鎌倉新佛教とその時代

凡そ如何に偉大なる個人と雖も、その時代を越えることは出来ない。後世永く宗祖と仰がるべき宗教的天才と雖も、その時代に於て思惟し、その時代との關はりに於て、しかもその時代を越えて新らしい文化を創造して行つたものと云はなければならぬ。

親鸞・道元・日蓮といふが如き我國二千六百年史上類稀なる三師が、しかも時を同じうして現はれ出でたことは、日本精神史上に於ける一つの驚異であり、こゝに我々は力に溢るゝ鎌倉時代のもつ日本的性格を凝視しなければならない。

鎌倉時代とは、政治的には武家政治の始まつた時代であり、これ以後の文化はすべて武家との關はりを離れては考ふことが出来ない。武家の特色は何といつても力であり、それは平安末期に於ける一部貴族階級を中心とする弱き文化を越えて、そこに逞しき文化を形成して行つたものであると云はなければならない。愚管抄の著者が「ひしと武士の世になりにし也」と述べてゐる如く、鎌

倉時代一般の特色がこの武家との關聯に於て存するものである。

源賴朝が幕府を開いたのは、道元の生れる八年前、親鸞の二十歳の時のことである。親鸞は、高倉天皇承安三年に生れてゐるのであるが、この年に又かの梶尾の明慧も生れてゐる。その後日蓮は親鸞の五十歳、道元の二十二歳の時に誕生してゐる。しかしてこの誕生の前年に承久の變が起つてゐる。その後道元は、後深草天皇建長五年五十四歳を以て歿してゐるが、長命であつた親鸞はこの時八十一歳であり、彼は九十歳まで生き永らへてゐる。なほこの年三十二歳の日蓮は、日蓮宗を開宗するに至つてゐる。親鸞の歿した年四十一歳であつた日蓮は、その後文永・弘安の役を経験し、後宇多天皇弘安五年六十一歳を以て歿してゐる。これ等を以てしても略々これ等の三師が如何なる時代に於て活躍してゐたかを推察することが出来るであらう。

〔二〕 鎌倉新佛教の性格

復古と純化

創造せられ行く時代に於ては、復古的な傾向をとるを常とする。日本的自覺に基づき、新らたなる宗教が建設せられた鎌倉時代に於ても、それを支配する性格は、復古と純化であつたと云ひ得

よう。そこには先づ古代日本精神の再生ともいふべき武人勃興と、それに伴ふ封建制度の精神があり、古代に於ける氏族連帯の思想と相通する主從恩義の觀念が存した。

佛教界に於ける復古的精神は、聖德太子への信仰に於て示されてゐる。當時に於て、日本文化の祖と仰がれ給ふた聖德太子が追慕せられ尊崇せられたことは、太子に復歸して、そこに新らたなる文化を創造して行かうとする時代意識を物語るものと云ひ得よう。當時にあつてはこれによつて歴史的傳統に入り、そこに新らたなる發展を爲さうとしたことが察せられる。親鸞は「和國の教主聖德皇」と太子をたゞへたのであるが、その廣大の恩德は謝しがたきものであり「一心に歸命したてまつり、奉讀不退ならしめ」ねばならぬと太子の佛法弘興の恩の深きこと、有情救済の慈悲の廣きことを體驗したのである。道元もまた佛法を我國に流通せる聖德太子を「人天の導師」「衆生の父母」なりとして尊崇し奉つた。なほ諸宗を折伏してやまなかつた日蓮も、法華義疏を製し給へる太子を尊崇し奉つてゐる。

これ等三師の太子追慕の精神は、教理的に考ふるも、太子の一大乗の御精神の發展と見なければならぬ。親鸞の本願圓頓の宗教、道元の本證妙修、日蓮の法華本門の宗教は何れもそれである。

當時に於ける復古的精神は、なほ史傳僧傳の集編が多くなさるゝに至つてゐることによつても察

せられる。

鎌倉新佛教の發生しなければならなかつた同じ時代に於て、舊佛教の復興がなされた。舊佛教の先づ第一は華嚴宗の明慧である。明慧は梅尾にあつたのであるが、彼こそはこの上もなき純眞さを以て、佛教を復興せんとし、釋尊當時の眞の佛教にまで建設せんと意氣込んでゐたのである。彼はその消息に「如來の在世に生れ遇はざる程に口惜き事は候はざる也。我も人も在世若しくは諸聖の弟子迦葉舍利弗目連等のいませし世に生れたらましかば、隨分に生死の苦種を拈^{ねん}じ、佛道の妙因を植て人界に生れたる思出とし候べきに、如來入滅の後、諸聖の弟子も皆失給へる世に生れて、佛法の中にをいて一の位を得たる事も無て、徒らに生れ徒らに死する程悲き事は候はず」(明慧上人傳記上)と述べ、末法片州に生れたるを悲しみ、釋迦の誕生せる印度に遙か想ひを寄せ、彼地に渡らんとして日程まで定めたのであつたが、春日明神の勸告で思ひ止まつたと云はれてゐる。しかし彼は止むに止まれぬ心情から次の如き書を釋尊の許に捧げて自己の眞情を吐露してゐる。

大聖慈父釋迦牟尼佛如來御寶前

遣法御愛子成辨

あからさまに罷出候て復たなに事か候らん。あまりにこひしくこそおもひまいらせ候へ。成辨が罷還候は性憲に物をも請て免すべく候。御た免にこゝろやすく可思食候也。早々に罷還候て見參